

7  
喜  
田  
集  
  
宮  
の  
上  
遺  
跡  
群  
宮  
の  
上  
遺  
跡  
群  
1  
  
佐  
久  
市  
文  
化  
財  
調  
査  
報  
告  
書

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第243集

# 宮の上遺跡群 宮の上遺跡VI

長野県佐久市三河田宮の上遺跡発掘調査報告書

2017. 3

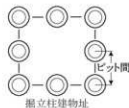
佐久市教育委員会

## 例言

- 1 本書は株式会社シナノによる工場新築工事に伴う宮の上遺跡VIの発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 株式会社シナノ
- 3 調査主体者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地 宮の上遺跡群 宮の上遺跡VI (YMMVI)  
佐久市三河田字柳原319-1
- 5 調査担当者 上原 学
- 6 本書の編集・執筆は上原が行った。
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡例

- 1 遺構の略称は以下のとおりである。  
H—竪穴住居址 F—掘立柱建物址 P—ピット
- 2 遺構断面図の標高は遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。
- 3 遺構の計測値は以下のとおりである。



- 4 スクリーントーン（網点）の表示は以下のとおりである。

遺構 焼土 ■■■ 床下 ■■■ 地山 ■■■ 遺物 黒色処理 ■■■ 施種範囲 ■■■ 須志器・灰釉陶器断面 ■■■

- 5 遺物の実測図番号と写真番号は対応し、実測図1/4・写真1/3の縮尺で掲載した。
- 6 本書の方位マークは真北を示し、座標値は世界測地系に準拠している。
- 7 観察表内における ( ) は推定値を、[ ] は残存値を示す。

## 目次

例言

凡例

目次

第I章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査日誌	1
第4節 遺構・遺物の概要	1
第II章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3節 基本層序	4
第III章 遺構と遺物	4
写真図版	
抄録	

## 第I章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

宮の上遺跡群は、佐久市横河・三河田に所在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。北側の湯川と南側の千曲川・滑津川に挟まれた東西に長い台地上に位置し、標高679m内外を測る。

今回、遺跡内において株式会社シナノによる工場新築工事が計画されたため、遺構の確認を目的とした試掘調査を平成28年6月2・6日に実施した。その結果、平安時代の竪穴住居址3軒等が検出された。保護協議の結果、建物建設地直下にて発見された遺跡の記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。

なお、開発地域南西隅で発見された住居址1軒は、建物範囲から外れるため、埋土保存とした。

発掘調査は、表土を除去した調査範囲に4mグリッドを設置した。その後人力により遺構確認の精査・遺構検出を行い、遺構掘削・写真撮影・実測図作成作業を順次行った。

### 第2節 調査組織

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤 晴樹
事務局	社会教育部長	荻原 幸一	
	文化振興課長	三石 建	
	企画幹	小林 登志郎	
	文化財調査係長	大塚 広樹	
	文化財調査係	小林 眞寿 富沢 一明 上原 学 神津 一明 生島 修平	
	臨時職員	森泉 かよ子	
	調査担当者	上原 学	
	調査員	赤羽根 篤 浅沼 勝男 小幡 弘子 中澤 登 羽毛田 敏明 比田井 久美子 武者 幸彦 横尾 敏雄 渡辺 学	

### 第3節 調査日誌

平成28年7月6日	遺構検出作業。住居址掘り下げ開始。調査区内にグリッド杭を打設。
7月7日～	遺構掘り下げ、遺構写真撮影、遺構断面図・平面図作成を順次行う。
7月12日	調査区内を清掃し、全景写真撮影を行う。
7月13日	機材撤収作業。現場作業終了。
7月21日～	室内作業開始。遺物洗浄、注記、接合、実測等を順次行う。
平成29年3月24日	報告書を刊行し、すべての作業を終了する。

### 第4節 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址 2軒（平安時代）、掘立柱建物址 1棟、ピット 27個
遺物	土師器（坏・碗・甕・鉢）、須恵器（坏・甕）、灰釉陶器（皿・壺）、石製品（砥石・擦石・敲石）

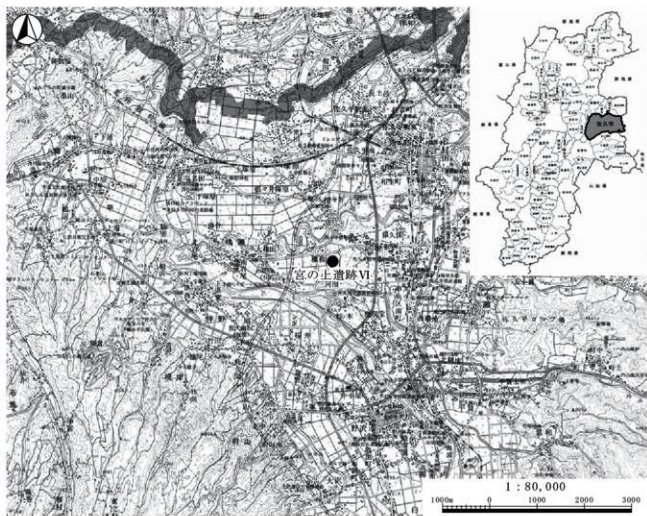
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第Ⅰ節 地理的環境

佐久市は長野県中央東端、群馬県に接し四方を山地・台地に囲まれた標高700m程度の盆地内に位置する。佐久平と呼ばれるこの盆地は、東に荒船山・物見山・寄石山・八風山などを主峰とする佐久山地、北に浅間山、南に蓼科山・八ヶ岳を望み、その中央には周囲の山々から流れる支流を集めながら千曲川が北流する。

佐久平の地質を概観すると、千曲川により南北に二分される。南側は蓼科・八ヶ岳山麓からの小河川により形成された小規模な扇状地及び千曲川の沖積低地が広がり、河床礫層と沖積粘土層が主体となる。一方北側は浅間山麓の緩やかな台地で、浅間山の火山噴出物である第一軽石流が厚く堆積している。この堆積物が河川の浸食を受けて形成された浸食谷、いわゆる“田切り地形”が特徴的に発達している。

宮の上遺跡群は佐久平のほぼ中央に位置する佐久市横和・三河田に所在する。浅間山麓から延びる台地の南端部にあたり、佐久市街地を西流する湯川が軽石流の台地を浸食して形成した河岸段丘上に位置する。標高約680mの段丘は、北側には湯川、南側には千曲川・滑津川が西流し、河川との比高差は20～30mを計る。当該段丘上は軽石流上に軽石流二次堆積物である砂礫層、いわゆる“湯川層”が堆積しており、宮の上遺跡もこの砂礫層を基盤層としている。

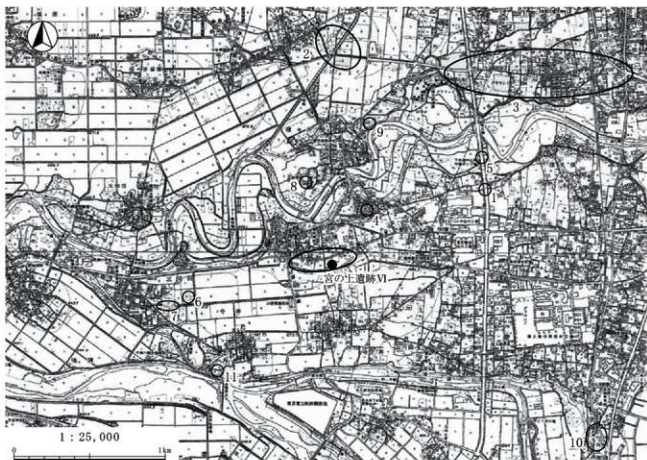


宮の上遺跡VI位置図

## 第2節 歴史的環境

ここでは宮の上遺跡周辺の発掘調査結果から、歴史的環境を概観したい。下図に周辺遺跡を示したが、遺跡範囲はおおよその発掘調査地点を示しており、包蔵地範囲とは異なる。

本遺跡周辺の台地は、約13,000年前の浅間軽石流及び軽石流二次堆積物により構成されているため旧石器時代の遺跡は皆無である。縄文時代の遺跡も希薄であり、遺物が散見される程度で集落跡などは発見されていない。しかし寺畑遺跡(1)からは佐久市内で唯一、縄文時代草創期(約12,000年前)の爪形土器片が出土しており注目される。弥生時代中期後半になると本格的な住居が認められるようになり、湯川沿岸部では遺跡が急増する。特に西一里塚遺跡(2)から岩村田遺跡群(3)一帯は住居が密集しており、地域の拠点を成すような大集落が存在したと考えられる。古墳時代になると集落は一時減少するが、中期後半以降再び増加に転じる。このころ台地上に古墳が築かれるようになり、北西の久保古墳群からは多量の形象埴輪が、東一本柳古墳からは金銅製の馬具が出土している。奈良・平安時代においても弥生・古墳時代と同様の地点に集落が営まれ、岩村田遺跡群(3)では300軒以上の住居が発見されている。湯川左岸でも、本遺跡のほか、根々井芝宮遺跡(4)、寺畑遺跡(1)、仲田遺跡(5)、今井西原遺跡(6)、下原遺跡(7)などで住居址が確認されており、広く集落が営まれていたことがわかる。仲田遺跡では白銅鏡(花卉双蝶八花鏡)や「寺」の文字が墨書された土器など、寺院の存在を示唆するような遺物が出土している。本遺跡では過去5次の調査が行われており、平安時代の竪穴住居址や掘立柱建物址などが検出されている。中世では湯川右岸に根井氏館跡(8)、根々井東原館跡(9)、滑津川右岸には深堀城跡(10)や今井城跡(11)などの城館跡が存在する。

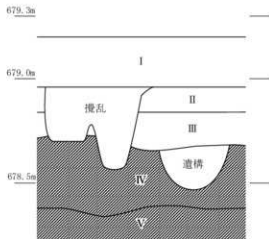


宮の上遺跡VI周辺遺跡分布図

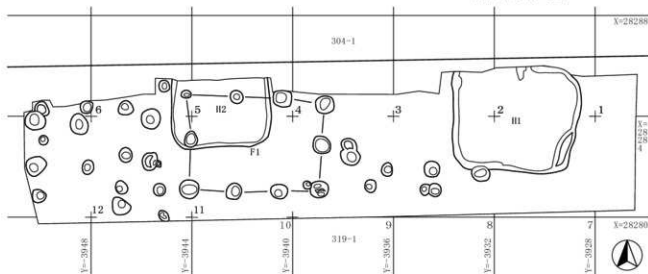
### 第3節 基本層序

本調査区は湯川の河岸段丘上に位置し、佐久市北部一帯を被覆する浅間第一軽石流の二次堆積物が地山となる。本調査で確認された土層を以下のⅠ～Ⅴ層に大別する。

- Ⅰ層 黒褐色を呈する、しまりのない耕作土である。
- Ⅱ層 黒褐色を呈する、ややしまりのある旧表土である。
- Ⅲ層 黒褐色を呈する、ロームと耕作土の中間層である。
- Ⅳ層 やや砂質の黄褐色土であり、浅間第一軽石流の二次堆積によって形成されたと考えられる地山である。Ⅳ層上面で遺構が確認できる。
- Ⅴ層 明黄褐色を呈する砂である。



基本層序模式図



宮の上遺跡VI 遺構配置図(1:150)

## 第三章 遺構と遺物

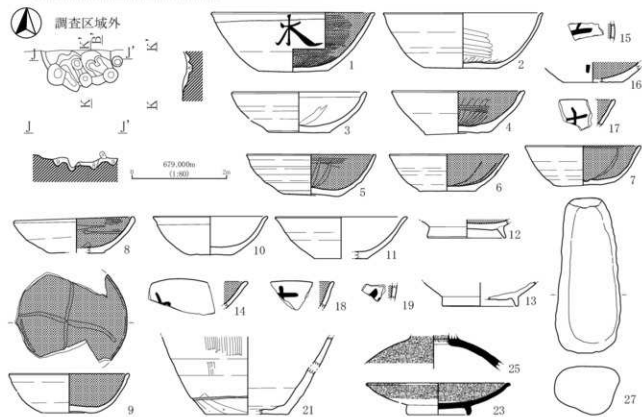
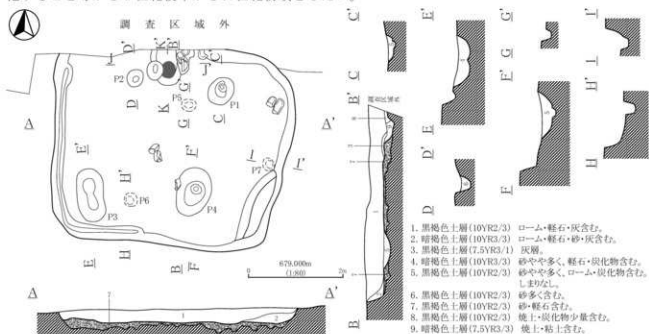
### H1号住居址

調査区東に位置する。規模は、南北3.9m、東西4.7m、深さは検出面から床面までの最深部で40cm、床面積は約18.3㎡を測る。形状は、やや東西方向に長い長方形の住居址である。主軸はN-5°-Eでほぼ南北方向である。北西コーナー付近の一部は調査区域外となる。埋土は黒褐色土を主体とする自然堆積土である。床面は全体的に硬質だが、硬質面は薄い。壁溝は西壁際から南壁西寄りにかけて認められた。側壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。南東コーナーには地山砂質ロームが台状に堆積していた。ピットは床面上で4個確認されたが明らかに主柱穴と判断できるものはなかった。カマドは北壁の中央に構築されている。東軸の一部と火床が残存していた。袖部は石材を粘土で覆う形で構築されていた。

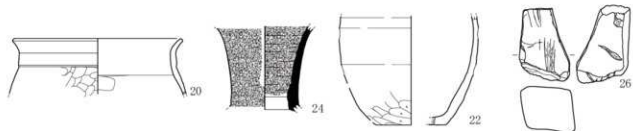
遺物は土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、灰釉陶器、砥石、擦・蔽石が出土した。個体数的には土師器坏が多く、内面黒色処理の割合が高い。大半の底部はやや小径になり、糸切り後未調整であるが、やや大型の個体は底部全面へラケズリを施す。表面に墨で文字を記した墨書土器も存在する。土師器

甕はロクロ甕と武蔵甕が認められる。器厚が薄く口縁の形状が「コ」の字状を呈する武蔵甕は、やや小型である。須恵器は坏と甕が存在するが、土師器に比べると個体数は少ない。この他、灰釉陶器の皿と壺が認められる。比較的形状が確認できる個体を図化した。

時期は、僅かに須恵器が認められ、土師器甕の主体がロクロ甕であること、土師器坏の底部が小型化すること等から9世紀後半から10世紀初頭としたい。



H1号住居址 遺構・遺物実測図



H1号住居址 遺物実測図

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様	残存率・部位	備考
1	土師器	杯	17.2	7.4	6.3	外縁ロクロナデ、裏蓋あり 内面黒色地帯 底面黒色ナツメ	95%	外図: 0197/4 12.01-褐色 外図: 0197/4 12.01-褐色
2	土師器	杯	16.8	7.9	6.8	外縁ロクロナデ 内面トナメ 底面全面ナツメ	70%	外図: 0198/4 12.01-褐色 外図: 0198/4 12.01-褐色
3	土師器	杯	(14.2)	6.9	4.3	内面黒ロクロナデ 内面黒色地帯 底面黒色地帯	45%	外図: 0199/4 12.01-褐色 外図: 0199/4 12.01-褐色
4	土師器	杯	14.0	6.9	4.7	外縁ロクロナデ 内面黒色地帯 底面黒色地帯	70%	外図: 0200/4 12.01-褐色 外図: 0200/4 12.01-褐色
5	土師器	杯	13.6	6.0	4.4	外縁ロクロナデ 内面黒色地帯、十字状文 底面黒色地帯	70%	外図: 0201/4 12.01-褐色 外図: 0201/4 12.01-褐色
6	土師器	杯	12.5	5.9	3.9	外縁ロクロナデ 内面黒色地帯、扇状短文 底面黒色地帯	70%	外図: 0202/4 12.01-褐色 外図: 0202/4 12.01-褐色
7	土師器	杯	12.2	6.5	4.3	外縁ロクロナデ 内面黒色地帯、扇状短文 底面黒色地帯	80%	外図: 0203/4 褐色 外図: 0203/4 褐色
8	土師器	杯	12.8	5.8	3.6	外縁ロクロナデ 内面黒色地帯、扇状短文 底面黒色地帯	70%	外図: 0204/4 12.01-褐色 外図: 0204/4 12.01-褐色
9	土師器	杯	(12.6)	5.8	4.1	外縁ロクロナデ 内面黒色地帯、十字状短文 底面黒色地帯	55%	外図: 0205/4 12.01-褐色 外図: 0205/4 12.01-褐色
10	土師器	杯	12.0	4.6	4.0	内面黒ロクロナデ 底面黒色地帯	40%	外図: 0206/4 褐色 外図: 0206/4 褐色
11	土師器	杯	(13.9)	(5.3)	4.4	内面黒ロクロナデ 底面黒色地帯	30%	外図: 0207/4 褐色 外図: 0207/4 褐色
12	土師器	碗	-	8.1	[1.9]	内面黒色地帯、扇状短文 底面黒色地帯	底部	外図: 0208/4 褐色 外図: 0208/4 褐色
13	土師器	碗	-	(7.8)	[2.6]	底面黒色地帯、扇状短文付 内縁割離	底部	外図: 0209/4 12.01-褐色 外図: 0209/4 12.01-褐色
14	土師器	杯	-	-	-	外縁ロクロナデ、裏蓋あり 内面黒色地帯	口縁破片	外図: 0210/4 12.01-褐色 外図: 0210/4 12.01-褐色
15	土師器	杯	-	-	-	外縁ロクロナデ、裏蓋あり 内面黒色地帯	破片	外図: 0211/4 褐色 外図: 0211/4 褐色
16	土師器	碗	-	(6.2)	[2.1]	外縁ロクロナデ、裏蓋あり 内面黒色地帯 底面黒色地帯、扇状短文	底部	外図: 0212/4 12.01-褐色 外図: 0212/4 12.01-褐色
17	土師器	杯	-	-	-	内面黒ロクロナデ、外縁ロクロナデ 内面黒色地帯	口縁破片	外図: 0213/4 12.01-褐色 外図: 0213/4 12.01-褐色
18	土師器	杯	-	-	-	外縁ロクロナデ、裏蓋あり 内面黒色地帯	口縁破片	外図: 0214/4 褐色 外図: 0214/4 褐色
19	土師器	杯	-	-	-	外縁ロクロナデ、裏蓋あり 内面黒色地帯	破片	外図: 0215/4 褐色 外図: 0215/4 褐色
20	土師器	甕	(17.6)	-	-	口縁ロクロナデ 外縁ナツメ 内面ナツメ	口縁下部	外図: 0216/4 12.01-褐色 外図: 0216/4 12.01-褐色
21	土師器	甕	-	(8.8)	[8.1]	外縁トナメナツメ 内面ナツメ 底面ナツメ	胴下部~底部	外図: 0217/4 褐色 外図: 0217/4 褐色
22	土師器	甕	-	7.2	[11.4]	外縁ナツメ 内面ナツメ 底面ナツメ	胴下部~底部	外図: 0218/4 褐色 外図: 0218/4 褐色
23	灰軸陶器	皿	(15.2)	6.4	3.4	二三片高 内面黒に灰軸、口縁割離	35%	外図: 0219/4 灰白色 外図: 0219/4 灰白色
24	灰軸陶器	壺	-	-	-	口ナツメ 内面黒に灰軸割離	頸部	外図: 0220/4 灰白色 外図: 0220/4 灰白色
25	灰軸陶器	壺	-	-	-	口ナツメ 外縁、内面の一部に灰軸	肩部	外図: 0221/4 オリーブ色 外図: 0221/4 オリーブ色
26	石製品	砥石	長さ57.7	幅5.4	厚さ4.6	砥石面4面 一部に粗粒の砥石	重さ282g	
27	石製品	磨石	長さ16.4	幅6.8	厚さ5.1	両面・側面に粗粒 表面に磨り痕あり	重さ939g	

H1号住居址 遺物観察表

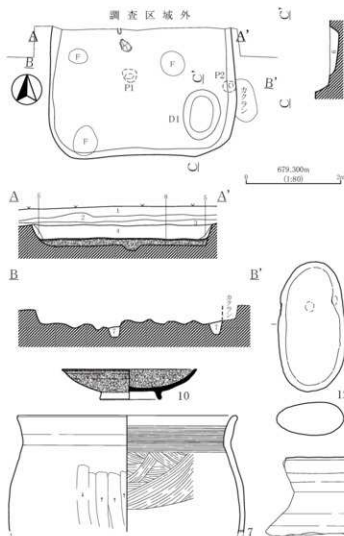
H2号住居址

調査区西に位置する。規模は南北2.5m（調査規模）、東西3.7m、深さは検出面から床面までの最深部で28cm、床面積は約9.21㎡（調査面積）を測る。F1号掘立柱建物址のビットに切られる。北側の一部は調査区域外である。主軸はN-1°-Wで、ほぼ南北方向である。埋土は暗褐色砂質土の自然堆積土である。床面はやや硬質だが、硬質面は薄い。壁溝は認められず、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址に関すると考えられるビットは2個認められ、東壁際と中央に存在する。南東コーナーに長径100cm、短径80cm、深さ20cmの土坑が存在する。カマドは確認されなかった。調査区域外の北壁に構築された可能性が考えられる。

遺物は土師器の杯・碗・甕・鉢、須恵器の杯・甕、灰軸陶器、磨石・砥石が出土した。個体数的には土師器杯が多い。表面に墨で文字を記した墨書土器も存在する。土師器甕はロクロ甕の破片が主体である。須恵器は杯と甕が存在するが数は少ない。杯のつくりは、やや粗雑である。その他、灰軸陶器の皿が認められる。比較的形状が確認できる個体を図化した。

時期は、僅かに須恵器が認められ、土師器甕の主体がロクロ甕であること等から、9世紀後半から10世紀初頭としたい。





1. 黒褐色土層(10YR2/3) 表土。しまりなし。
2. 黒褐色土層(10YR2/3) 表土。しまりややあり。
3. 黒褐色土層(10YR2/2) 表土。しまりややあり。
4. 暗褐色土層(10YR3/3) ローム・軽石・炭化物含む。
5. 暗褐色土層(10YR3/4) ロームやや多く含む。
6. 黒褐色土層(10YR2/3) 砂やや多く、軽石・ローム・炭化物含む。
7. 黒褐色土層(10YR2/3) 砂・軽石・ローム含む。
8. 暗褐色土層(10YR3/3) 粘土。やや硬質。砂含む。
9. 暗褐色土層(10YR3/4) 軽石・砂やや多く、炭化物含む。

H 2 号住居址 遺構・遺物実測図

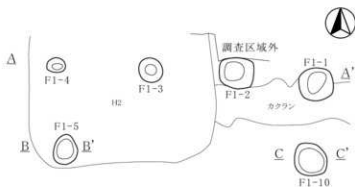
番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様	残存率・部位	備考
1	土器器	坏	13.4	5.6	3.6	外面ロクロナデ 内面黒色色焼 底面黒色色焼	99%	外底2.5187.6 棕色
2	土器器	坏	(13.5)	(5.7)	(4.0)	外面ロクロナデ 内面黒色色焼 底面黒色色焼 底面黒色色焼	40%	外底2.5185.6 棕色
3	土器器	坏	-	-	-	外面ロクロナデ。器蓋あり 内面黒色色焼	口縁破片	外底2.5187.14 棕色
4	土器器	碗	-	7.1	[5.8]	底面黒色色焼。やや成れの高低あり	底部	外底2.5185.9 棕色
5	土器器	坏	(13.2)	(6.2)	(4.0)	内外面ロクロナデ 底面黒色色焼	20%	外底2.517.2 灰黄色土
6	須恵器	坏	(13.6)	(5.8)	4.2	器底不詳 内外面ロクロナデ 底面黒色色焼	45%	外底2.517.1 黒褐色土
7	土器器	甕	(23.2)	-	-	口縁ロクロナデ 外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	口縁～胴上部	外底2.5185.6 棕色
8	土器器	輪軸甕	-	-	-	口縁ロクロナデ 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	口縁～肩部	外底2.5187.6 棕色
9	土器器	鉢	-	(8.8)	[7.4]	内外面ロクロナデ 内面黒色色焼 底面黒色色焼	体部～底部	外底2.5184.1 褐色
10	灰軸陶器	皿	14.1	6.6	3.2	三日月高台 内外面に30線、はけ塗り	70%	外底1.0180.1 灰白色
11	灰軸陶器	皿	(15.8)	(7.0)	3.9	三日月高台 内外面に30線、はけ塗り	30%	外底2.457.1 灰白色
12	石製品	磨石	長さ13.8	幅7.1	厚さ3.5	表面・裏面に磨き痕二箇所 表面全体に皮から	重さ564g	

H 2 号住居址 遺物観察表

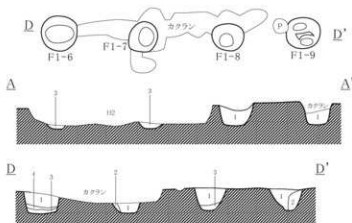
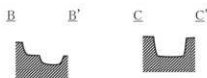
#### F 1 号掘立柱建物址

遺構は調査区の4グリッドに位置し、H 2 号住居址を切る。4×3の側柱である。ピットの平面形態はほぼ円形で、ピット間は1.6～2m、径は南北31～74cm・東西40～76cm、深さは39～53cmを測る。

遺物はピット内から土器の坏・甕、須恵器の坏・甕、灰軸陶器が出土した。時期は9世紀後半から10世紀初頭としたH 2 を切ることから、10世紀以降としたい。



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム・軽石・炭化物含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ロームやや多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4) 砂多く含む。しまりなし。
4. 褐色土層 (10YR4/4) 砂層。暗褐色土含む。

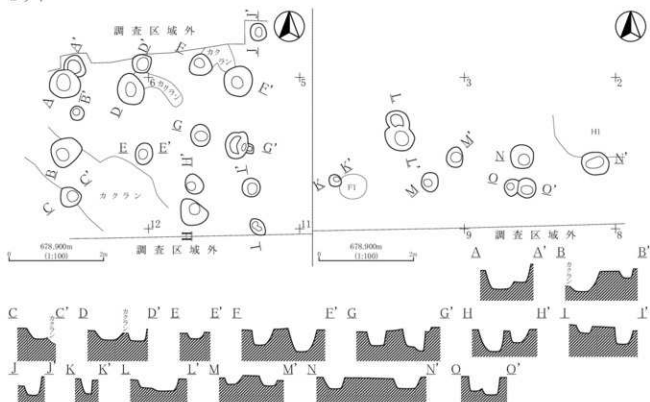


ピット規模 (南北×東西×深さ) cm			
F1-1	[70] × [73] × 45	F1-8	[57] × [68] × 46
F1-2	65 × 73 × 46	F1-9	66 × 72 × 45
F1-3	[52] × [50] × (53)	F1-10	69 × 69 × 40
F1-4	[31] × [40] × (39)		
F1-5	[64] × [52] × (51)		
F1-6	74 × 76 × 47		
F1-7	[64] × [61] × 44		

F1号掘立柱建物址 遺構実測図

F1号掘立柱建物址 ピット観察表

ピット



ピット実測図



調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



H 1 号住居址全景 (南から)



H 1 号住居址遺物出土状況



H 1 号住居址カマド周辺 (南から)



H 1 号住居址掘方全景 (南から)



H 2 号住居址全景 (南から)



H 2 号住居址掘方全景 (南から)



F 1 号掘立柱建物址 (南から)



調査区西側ピット群 (南東から)



調査区東側H1号住居址周辺ピット群（南から）



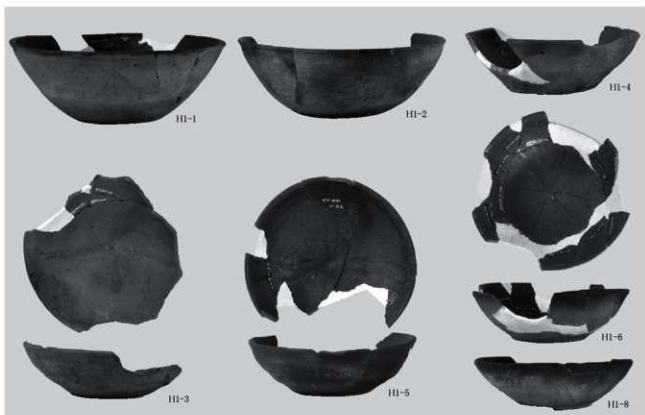
遺構検出状況（西から）



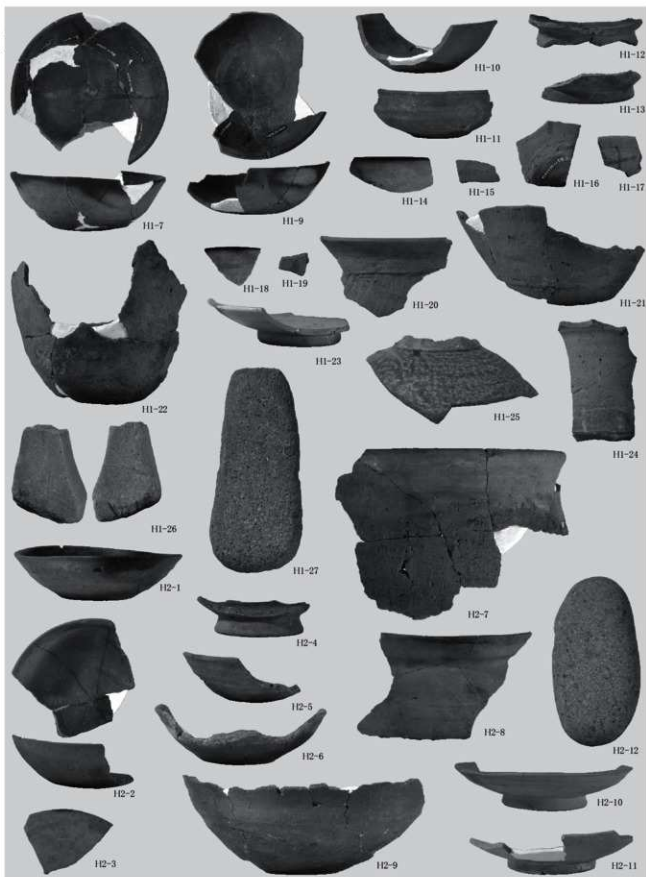
調査風景（南西から）



調査風景（南西から）



H1号住居址出土遺物



H1·2号住居址出土遺物

ふりがな	みやのうえいせきぐん みやのうえいせきろく							
書名	宮の上遺跡群 宮の上遺跡VI							
副書名	—							
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第243集							
編著者名	上原 学							
編集機関	佐久市教育委員会文化振興課							
所在地	長野県佐久市志賀5953 ℡ 0267-68-7321 FAX 0267-68-7323							
発行年月日	平成29年(2017) 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みやのうえ いせきぐん みやのうえ いせきろく	さくし みかわだ あぎ やなぎはら	20217	240	36° 15' 18"	138° 27' 22"	20160706 ～ 20160713	110㎡	工場建設
宮の上遺跡群 宮の上遺跡VI	佐久市 三河田字 榎原319-1							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
宮の上遺跡群 宮の上遺跡VI	集落	平安	竪穴住居址2軒、掘立柱 建物址1棟、ピット27個		土器（土師器・須恵器・灰 輪陶器）、石製品	平安時代(9～10世紀)の 集落が発見された。		
要 約	佐久市を西流する湯川との比高差約20mを測る左岸台地上に展開し、弥生から平安時代を中心とする複合遺跡である。今回の調査からは平安時代(9世紀後半～10世紀初頭)と考えられる竪穴住居址2軒等が発見された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第243集  
宮の上遺跡群 宮の上遺跡VI

平成29年(2017) 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課文化財事務所

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

℡0267-68-7321

印刷所 株式会社 佐久印刷所

